

まつてゐる。その以前所謂神代文字や特殊の文字の使用せられたことを説くものもあるが信じ難い。勿論漢字の傳へられた後も、始めの間は一般的に使用せられるまでには至らなかつたと思はれるが、漸次その使用範圍が擴まり、漢字で漢文を書き、これを國語で讀むと共に、漢字の音で國音を表はすことも同時に行はれた。「須賀須賀斯」とかいて「すがすがし」と讀んだ類がこれである。かやうに漢字の音で國音を寫すことから、遂に漢字を基にして、國字を作ることが工夫せられた。それが即ち假名であつて片假名平假名の兩體が案出せられることになつた。誰が何時これらの假名を作り出したかについては諸説必ずしも一定しない。思ふに漢字を省略して行はれることになつた諸種の假名の字體が五十音圖の書かれ、いろは歌の書かれた頃に漸く一定することになつたのであらう。それは兎も角、この假名は大概漢字の扁や旁を採つて作られたものであること更めて説くに及ばないがこの五十ばかりの假名を知つて居れば、すべての國語を寫すことが出來、便利至極のものである。

一體漢字の多くは象形より成つて居り、従つて物のある限りそれに應ずる文字がなければならぬ。獨り漢字ばかりでなく、文字發達の始は各民族みな同様で、象形即ち形を繪にかいて事物を寫し居つたのである。しかしこれでは複雑で不便であるから文化の發達するにつれて工夫が加へられ、物を形で寫す代りに、吾人が事物を稱する音聲を一種の符號で寫すことを案出するに至るのが普通で、これが即ち音聲文字で、アルファベット文字の如きの發明されるに至つた段階である。然るに支那ではこの普通の發達經路を辿らないで、文字の發明された悠遠の時代から今日に至るまで、依然として主として象形より成る文字を用ひてゐる。ところで我が國ではこの複雑極まりなき漢字を輸入しながら、敏くもその漢字を利用してこれに基づいて吾人の音聲を寫す方法を發明し、所謂假名文字を用